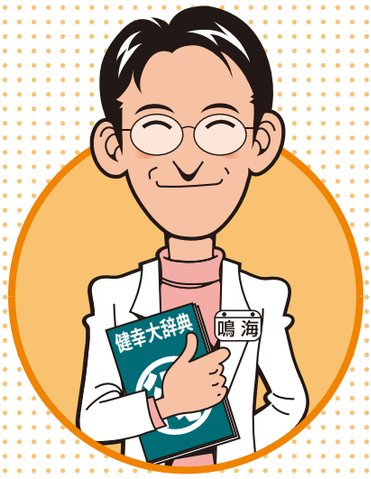

こころとからだの 健幸タイム

No.295

喫茶去

先月号は「甘いもの」について書いたので、今月は「お茶」の話をどうぞ。
（バックナンバーはエヌ・ピュア公式サイトからご覧いただけます）

まあ、お茶でも飲んでいきなさい

ほぼ毎年のように訪れる大好きなところに、山形県鶴岡市の国見山玉川寺があります。800年ほど前に創建された曹洞宗（禅宗）の古刹で、美しい庭は国指定の名勝にもなっているほど。その名園を眺めながらお茶とお菓子をいただくのが、至福のひと時なのであります。

そして、その広間に飾ってあるのが「喫茶去」と書かれた掛け軸。「喫」は、食べたり飲んだりすることなので「まあ、お茶でも飲んでいきなさい」という感じなのですが、もう少し深い意味もあるそうです。

「喫茶去」という言葉に込められた想い

「喫茶去」は、もともと禅宗の言葉（禅語）で、唐の時代の禅僧・趙州禅師の語録にある言葉です。「お茶でも飲んで去れ」と相手を叱咤するものだったという説とともに、こんなエピソードも伝わっています。

あるとき、趙州禅師のところへ二人の修行僧がやってきました。

（禅師）「あなたはこの場所へ来たことはありますか？」

（修行僧）「いえ、初めて来ました」

（禅師）「喫茶去（まあ、お茶でも飲んでいきなさい）」

（禅師）（もうひとりの修行僧に）「あなたはこの場所へ来たことはありますか？」

（もうひとりの修行僧）「はい、来たことがあります」

（禅師）「喫茶去（まあ、お茶でも飲んでいきなさい）」

その後、院主（お寺の責任者）が禅師に訊ねました。

（院主）「先ほど、ここへ来たことがない修行僧にも、一度来たことがある修行僧にもお茶を勧めていましたが、なぜですか？」

（禅師）「院主さん、喫茶去（まあ、お茶でも飲んでいきなさい）」

禅師と修行僧と院主のやりとり、なんか、いい感じじゃないですか？笑

なぜ、禅師がおなじように「喫茶去（まあ、お茶でも飲んでいきなさい）」とお茶を勧めたのか。そこには「仏さまの前では、老若男女も、貧富の差も、身分の差も、まったく関係がなく、いま、この時間と場所を共に過ごしているという一期一会のご縁をたいせつにする」という想いと「まずは、お茶でも飲んで、楽にゆっくりしましょう」と、静かに自分と向き合う時間を持つことのたいせつさが込められているように思います。

行雲流水

おなじく禅の言葉に「行雲流水」があります。

「空を行く雲や、流れる水のように、なにごとにも執着することなく自然界の摂理に身を委ねて生きる」

そんな氣持ちを想い出すためには、やはり、自然界の摂理が反映されている美しい景色と、ゆったりとした時間を持つこと、まさに「喫茶去」の精神が、たいせつになるでしょう。

ということで、美しい景色を眺めながら、ゆったり美味しいお茶とお菓子をいただくことができる玉川寺さんへ、来年もまた伺うのであります（笑）

鳴海周平プロフィール



1971年北海道生まれ。心身の波動を高める製品の開発・普及をおこなう㈱エヌ・ピュア代表。健幸エッセイスト、ヒーラーとしても、ラジオ番組や講演、ブログ、著作などを通じて「こころとからだの健幸情報」を発信している。著書に『医者いらずになる 1分間健康法』（帯津良一氏との共著）『[小食・不食・快食]の時代へ』（はせくらみゆき氏との共著）（ここまでワニ・プラス刊）『1分間ヒーリング』（徳間書店刊）などがある。最新刊は『「運」のミカタ』（ワニ・プラス）。

LINE 友達登録 こちらから

アメーバブログ
https://ameblo.jp/npure/

エヌ・ピュア公式サイト
https://npure.co.jp